

共に是れ凡夫のみ

聖徳太子、十七條憲法第十「十に曰く、こころのいかり 忿を絶ち、おもてのいかり 瞋を棄て、人の違ふを怒らざれ。人皆心有り。心各執れること有り。彼れ是むずれば、則ち我は非みす。我れ是むずれば則ち彼は非みす。我れ必ずしも聖に非ず、彼れ必ずしも愚に非ず、共に是れ凡夫のみ。是みし非みするの理、詎なぞ能く定むべき、相共に賢く愚かなること鏝の端無きが如し。是を以て彼人は瞋ると雖も還つて我が失を恐る。我れ獨得たりと雖も衆に従ひて同じく擧おこなへ。」

怒の因縁

「こころのいかり 忿を絶ち、おもてのいかり 瞋を棄て、人の違ふを怒らざれ。」聖徳太子の尊きみ教である。しかしそうとう痛みみ教である。腹が立つ心は、誰も持ち合せた心であるからである。腹が立つ心ほどつらいものはない。全ての人がこれ故に困っている。而してそれは、必ず「人の違ふを怒る」ころである。自分が間違つて怒るものは一人としてあり得ない。故に「人の違ふを怒らざれ」と仰せられるのである。

共に走れ凡夫

しかし唯、怒るまい、腹を立てて、自他共に苦しむことから遠ざかりたいと思うだけでは、如何とも出来ない。そこで太子は、次の如く教えて下さる。

「人皆心有り。心各執れること有り。彼れ是むずれば、則ち我は非みす。我れ是むずれば則ち彼は非みす。我れ必ずしも聖に非ず、彼れ必ずしも愚に非ず、共に是れ凡夫のみ。」

この大意はこういうことである。人にはみな心がある。心があるから、それぞれ考えがある。その考えに執われているのが凡夫である。「一寸の虫にも五分の魂」と言うことがあつて、なかなか思うようになるものではない。そこで、その考えに立つて裁くとすれば「彼れ是むずれば則ち我れは非みす、我れ是むずれば則ち彼れは非みす。」彼を是とすれば、我は非であり、我を是とすれば、彼は非である。我を善とすれば、彼は悪、彼を善とすれば我は悪、彼を正しとすれば、我は邪、我を正しとすれば彼は邪ということになつて、必ずそこに善悪邪正の裁きが生れて来る。しかしながら「我必ずしも聖に非ず、彼れ必ずしも愚に非ず、共に是れ凡夫のみ。」誠に共に是れ凡夫である。

親子というも共に凡夫である。兄弟というも、師弟というも、善人というも、悪人というも、一切全て凡夫である。まことに、太子のこの断言こそは、大地に生きる者の正しい領解である。

他人を聖者の如く買ふが故に、その小さい過失に対してすら、天地が動くほどの驚きと怒りを覚えるのであり、自分が、賢い人のように思うが故に、自分の相が見えず、他人を裁いてばかりおるのである。人は皆、度しがたき凡夫に見え、自分は正道を歩んで、一歩も間違つてはいないと思う心こそ、我にとつての最大の敵ではあるまいか。

善悪定め難し

「共に是れ凡夫のみ。是みし非みするの理、なん詎ぞ能く定むべき、相共に賢く愚かなることく鑿の端無きが如し。」

鑿とは、金の輪のことである。共に凡夫であるから、是と言ったり、非と言うも、賢愚は鑿の端なきが如く、これを定むべき正しい標準が得られるものではない。故に「是みし非みするの理、なん詎ぞ能く定むべき」と言われるのである。誠に、同一の輪の一端を捕らえて善といひ悪といひているのである。そして自分を善しと思つては、怒りの心に苦しんでいるのである。

還つて我が失を怒る

「是を以て彼人は瞋ると雖も還つて我が失を恐る。」

この太子の言は、太子御自身の常に服膺あそばした信條であつたであろう。太子の崇高な信境であると共に、我々に残して下さつた教訓である。

自分の為に彼は瞋つている、その瞋つている彼をせめないで「彼人は瞋ると雖も還つて我が失を恐る。」と、我が方のあやまちを考え、見出して、自分の失を恐れる。かくの如く生きてゆけと言われるのである。誠に頂戴すべき教訓である。

初めに「こころのいかり忿を絶ち、おもてのいかり瞋を棄て、人の違ふを怒らざれ。」

とのみ教は「彼人は瞋ると雖も還つて我が失を恐る。」ことによつて生きて来るのである。そしてそれは、唯、如来の大悲によつて、信心の智慧の光を恵まれ、それによつて、内に眼が開かれてのみ成就することであろう。

失と感謝

氣をつけて歩んだようでも、人を瞋らしているものである。「人皆心有り。心各執れること有り。」である以上、それは悲しいことながら絶えずおこることである。人を瞋らした時、よく考えて見ると、やはり自分が悪いのである。

それにしても多くの同胞は、よくも、私の失を許して下さることではあると思うことである。

近頃、ある人が、私が旅立つ時に見送つて下さつた、それに対して礼状も何も出さなかつたこと等に対して大変に腹を立てていると聞いた。手紙を頂きながら返事を出さなかつたことによつて高慢な奴だと怒らしたり、誠に相すまぬことである。確に、私の失である。どんなに言われても言ひ訳の言葉はない。私の机の上には、時に手紙がたくさん積まれることがあり、それに対して一一返事を出していたら、何も出さない、それに原稿に何時も心と時を奪われているので、色々と御厄介になつても、手紙を頂いても、大方の場合、返事も礼状も出してはいない。出さないでも大方の人は今日まで許して下さつた。その許して下さつたことに甘えて、忙しい中を見送つて下さつても、お見舞状を頂いても、お礼状を出さなかつたり、出してもはがきであつたりして、人を瞋らしたことは、何と言つても私の失である。相すまぬことである。と同時に、こうした私の長い間の無礼をお許し下さつた同朋の御親切御理解に対して感謝せずにはおられない。

衆に従ひて

「我れ獨得たりと雖も衆に従ひて同じくおこな擧へ。」

これが太子のみ教である。たとえ自分独りは、信を獲ても、道を獲ても、我は獲たと思つて高上りしてはならない。衆と共に、世間なみに同じくおこな行つてゆけ、と言われるのである。獲たと思ふは獲ざるなり、獲れば獲るほど衆生に同じて生きることが真の道であつた。

人を瞋らしてはならない。しかし我が悪に対し、失に対しては、遠慮なく、心ゆくまで叱責したまえ。それによつて我が相を知らして頂くであらう。「共に是れ凡夫のみ」とは、我に於ては「我は是れ凡夫のみ」であるが故に。